

★記念植樹式開催 ヴァイヴァルス大使・石井陽一神戸市副市長をお迎えして★

2009 年 11 月 11 日 神戸市立森林植物園にて

神戸市とリガ市は 1974 年 6 月 18 日に姉妹都市となり、本年満 35 年を迎えました。

良き友好の歴史を振り返り、未来に向かってさらに固い絆を結んでいく機会にしようと、多くの方が神戸市立森林植物園に集まりました。

本来なら、園内にある記念の場所「リガの森」にてラトビアから運ばれた白樺の植樹式が催される予定でしたが、あいにく雨模様で急きょ植物園展示館 1 階ロビーにて、白樺苗の寄贈式が執り行われました。

幼い苗木が、ヴァイヴァルス大使から石井副市長へと手渡されると、駆けつけた会員約 70 名が拍手で祝い、末永い友好を願いました。

苗は後日「リガの森」に植樹されましたので、ぜひ一度お出かけください。【神戸市立森林植物園】電話 078-591-0253

場所：神戸市北区山田町上谷上字長尾 1-2

交通：神戸電鉄「北鈴蘭台」駅から無料送迎バス約 10 分
(朝 9 時から毎正時 1 時間各に発車)



ヴァイヴァルス大使と石井副市長



ヴァイヴァルス大使

【ヴァイヴァルス大使の挨拶】

在大阪ラトビア共和国名誉領事館ならびに関西日本ラトビア協会の皆様には、昨年の設立以来、様々なイベントを開催いただき、非常に喜ばしく思っています。今回の植樹式も関西日本ラトビア協会からの発案であったと聞き、たいへん感謝しています。また神戸市とはリガ市が姉妹都市として交流を深めてまいりました。今年はぜひリガを訪問していただきたかったのですが、新型インフルエンザが発生してリガ訪問が延期になったことは非常に残念でした。来年はぜひともラトビア訪問が実現できることを願っています。

姉妹都市交流は、国同士の文化交流、ビジネスの交流の基盤であり、これから大切にしていきたいと思います。今回の植樹式がその新たなスタートになるものと確信しています。

リガ市長からメッセージ (2 ページ掲載) を預かりましたので後ほど披露いたしますが、今回の植樹はリガ市長も大変喜んでいました。

関西には神戸大学や関西学院大学などがラトビアの大学と交流されており、将来を担う若者たちがお互いの国を理解しあうことは、将来のラトビアと日本にとって大変価値あることだと思います。盛んな交流がこれからもますます続いていくことを期待いたします。

本日はありがとうございました。



記念植樹の銘板

【関西日本ラトビア協会 会報 第2号 掲載内容】

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 記念植樹式開催 神戸リガ姉妹都市 35 周年 | 7 名誉領事館日記：外務省リンダさん研修修了式 |
| 2 神戸市立森林植物園「リガの森」について | EU フィルムデイズ 2009・ラトビアの学生が来阪 |
| 3 ラトビア映画「バトル・オブ・リガ」鑑賞会 | 広島の中学生在が名誉領事館へ ほか |
| 4 オペラ歌手を迎えて歓迎会の開催 | 8 【寄稿】ラトビア人教師イアン・オゾリンが残したもの |
| 5 EU スクールデイズ ヴァイヴァルス大使岡山訪問 | 9 JLSK 第 1 回理事会・総会 |
| 6 ラトビア語教室スタート | 10 【連載】：ラトビアの歴史 |
| | 11 友好の歩み：合唱団「コールフェニックス神戸」 |

【植樹式開催の経緯】 姉妹都市 35 周年を記念して、昨年は 11 月にラトビアからヤーニス・ビルクス・リガ市長（当時）の訪問団があり、アカペラボーカルグループ「COSMOS」はじめ多くの方々が神戸を訪れました。



会場風景



ユーモラスに式典の進行をいただいた
藤本昌男理事



リガウッドジャパン上野代表
から苗の説明

その際、市長は森林植物園「リガの森」を訪れる予定でしたが、雨のため中止となり、王子動物園にてリガ市から贈られた象の「ズゼ」と面会されました。今年は神戸市長の訪問団がリガ市を訪れる予定でしたが、新型インフルエンザの影響で延期になったこともあり、当協会の権藤常務理事（元王子動物園長）の発案で「リガの森」にラトビアの白樺を植えて 35 周年記念としてはどうか？という企画が立てられ、JLSK 東郷理事長から矢田市長へ申し入れをしたところ快諾いただき、森林植物園市野園長のご協力をいただき植樹式の開催の運びとなりました。

白樺の苗は、8 月にラトビアを訪問した上野常務理事が持ち帰って来られたもので、植物園にて保管してもらっていたものです。上野さんは合板のスペシャリストとしてラトビアで長く技術指導などを行ってこられました。

上野さんによれば、環境保護がこれほど大きな問題になるずっと以前から、ラトビアでは伐採相当地分は必ず植林して国家規模で森林資源を大事に育てておられるそうです。わが国でも美しい自然環境を末永く未来につないでいくために、是非その精神を見習いたいと思います。白樺の成長を見守りながら、日本とラトビア共和国の友好がさらに発展していくことを祈りたいと思います。



上野さんが今年の夏にラトビアから白樺の苗木を持ち帰られた（8 月リガにて 左：外務省リンダさん、右：合板会社ラトビア・フエネリス役員ヴァルディスさんと）



来賓の皆様【左から田中神戸市会議員・東郷名誉領事・ヴァイヴァルス駐日大使・神戸市石井副市長・松本理事長（公園緑化協会）・市野園長・田中常務理事（公園緑化協会）・上田国際室長（神戸市）】

【リガ市長からのメッセージ】（ヴァイヴァルス大使が代読されました）

お集りの皆様、リガ市と神戸市の姉妹都市提携 35 周年記念イベントにお越し頂き、誠にありがとうございます。お互いの町と地域との間に築かれたすばらしい関係を、大変喜ばしく思っております。また、これまでの神戸市の歩みを知ることができたことにも感謝しております。

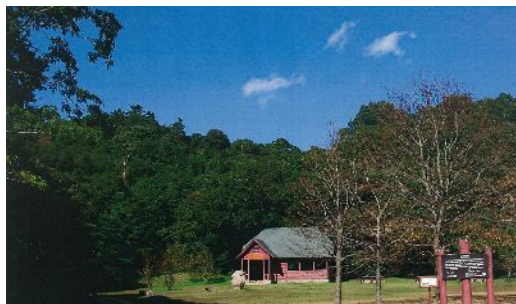
リガ市は、今後の行政における優先事項の一つとして「観光促進」を取り上げることとなりました。

今年、日本とラトビアとの間に始まった直行便運行を今後とも続け、両国の観光客、ビジネスマンにとって、より緊密な関係が築かれることを期待しております。そして、より緊密な観光関係により、今後も歴史的魅力を保ちながら、リガ市の発展を皆様にお見せすることができるでしょう。

リガ市と神戸市が深く、多面的な関係を強め、互いの理解がより深まることを心から祈っております。

ニルス・ウシャコフス リガ市長兼リガ市議会議員

★★森林植物園 「リガの森」のこと ★★ 姉妹都市 35 周年記念



「リガの森」には芝生広場があり、その周りにはリガ市周辺の植生に準じた樹木が、丁寧に配されています。最初に目に付く建物は、ラトビアの伝統的農家をイメージして建てられた休憩所です。そのほかラトビアからの訪問団による記念樹や、モニュメントがあります。四季を通じて多くの市民が集う憩いの場となっています。ぜひお立ち寄りください。



1985 年にアルクレッド・ルービックス市長と宮崎辰雄市長によって起工された友好の記念の場所です。

1986 年 5 月にはリガ市から親善訪問団があり、菩提樹の記念植樹が行われました。



インドゥリス・ランカ氏の「友好の彫刻」

1987 年 5 月にはリガ市出身の彫刻家インドゥリス・ランカ氏の 2 つの作品「青年」「友好の彫刻」が寄贈され、今回の植樹式にも参加された中井喜一神戸市土木局長（当時）によって除幕式が行われました。



★森林植物園では、姉妹都市 35 周年を記念して、10 月 1 日から 12 月 23 日まで「リガ展」を開催!!



★★ラトビア映画「バトル・オブ・リガ」鑑賞会★★



白樺の苗の授与式の終了後は、記念撮影と昼食会に続き、植物園展示館2階にてラトビア映画「バトル・オブ・リガ」の上映会が行われました。奇しくも11月11日は、映画で描かれたラトビアが独立を取り戻した歴史的な日と重なっており、不思議な縁（えにし）を感じずにはいられませんでした。感動的なストーリーに感動して涙する方もおられたほどでした。



【ラトビア映画】「バトル・オブ・リガ」（2007年）

監督：アイガルス・グラウバ 原題：リーガス・サルギ (Rīgas sargi) / 訳：リガの守り手

【あらすじ】 1919年、主人公の帰還兵マーティンシュは、名高いラトビア狙撃兵部隊の一員として第一次世界大戦を生き抜き故郷に戻り、婚約者のエルザと再会し結婚を誓う。しかし未だラトビアの独立は不安定で、挙式の当日、ドイツ軍によって首都リガが戦火に見舞われる。エルザとの生活を一旦あきらめマーティンシュは再び祖国を守るための戦いへの参加を決断。そして苦難の末、一般市民で構成された数千の義勇兵と共に戦い、侵略軍を退け首都を死守することに成功した。この奇跡的な勝利で、ラトビア共和国は独立国としての地位を確固たるものにし、マーティンシュとエルザは、ついに故郷での新しい生活を始めることができたのである。

映画評：シネマ「バトル・オブ・リガ」

（以前、東京の日本ラトビア音楽協会の会報に、ラトビアのことを良くご存知の会員の方が、この映画の評論を寄稿されていました。まだご覧になっていない方への作品紹介として、ぜひ転載させていただきたいとお願いしたところ快くご了解いただきました。）

筆者ならびに編集ご担当者のご好意に深く感謝申し上げます。なおご本人のご希望により匿名とさせていただきますことをご了承ください。）

6月6日および19日、東京港区立近代美術館フィルム・センターにおいてEU主催フィルム・フェスティバル（※注 9ページをご参照）が開催された。その一環として「バトル・オブ・リガ」が上映された。会場には日本ラトビア音楽協会会員の方々の姿も多数見られ大盛況であった。

この映画は1918年独立を宣言したばかりの脆弱なラトビア民族政権が1919年10月に圧倒的な兵力でリガを攻撃してきた帝国ロシアとドイツの残留部隊からリガを防衛した歴史である。

当時バルト地域には、第一次大戦後の極めて流動的な時代状況が残っており、独立を求めるラトビア民族政権のほか、ドイツ帝国とロシア帝国の残党、ボリシェビキ政権、バルトを故地とするバルト・ドイツ人の勢力が三つ巴四つ巴となって混戦を繰り返していた。

映画は、ラトビア建国史の一コマであるリガ防衛を、ラトビア・ライフル連隊の帰還兵マーティンシュと婚約者エルザの愛の行方を前面に出しつつ、ラトビア人の民族としての自由と独立を求める不屈の時代精神を壮大な叙事詩として描いている。ラトビアでは50万人の観客がみたということだ。

映像が素晴らしくその美しさに圧倒される。ダウガワ河の対岸から見たリガ市の姿は神秘的な美しさを放つ。最新のCG技術を駆使しダウガワ河を巡る攻防のスペクタクルは迫力がある。ラトビアではオペラや演劇が盛んであったためか独自の視覚美学をそなえており驚くほど洗練されている。達者な俳優陣、的確な演劇作法もオペラで培われた伝統だろう。名作「戦艦ポチョムキン」を作ったエイゼンシュタインを生んだラトビアのことである。どこか映画をつくるDNAがあるのかもしれない。歴史的名画といってよい。（次ページへ続く）

見所として強く印象に残るのが主役マーティンシュだ。マーティンシュが断然いい。ラトビア・ライフル連隊はラトビア随一のエリート部隊でレーニンの身辺警護でも名声をはせた。マーティンシュはそのライフル連隊の復員兵として帰国したが、進軍してくる侵略軍に対抗して祖国を守るため義勇兵を指揮し神出鬼没の活躍をする。その顔はつねに深い悲しみをたたえている。それは非情な大国の横暴に翻弄されつづける小国の運命の悲哀を象徴しているかのようだ。この悲しみと無常観こそ隠された真のテーマではなかろうか。

このマーティンシュを演じたヤーニス・レイニスは、ラトビア演劇界を代表する俳優の一人である。マーティンシュは実在の人物か。歴史映画は事実とフィクションを重ね合わせて作られる。実はマーティンシュはこの映画が作り上げた映像上の人物である。実際の英雄は卓越した指導力を発揮したウルマニス首相（その後大統領）とそれを支えた勇敢なラトビア人市民であろう。マーティンシュはこのような勇敢なラトビアの人々の理想を人格化したものといえよう。またマーティンシュはラトビアの伝説上の救国の英雄ラーシプレーシスと重なって見える。

その後もラトビアは1941年、1991年とそれぞれソ連の侵攻を受け熾烈な市街戦を戦った。この映画はそのような歴史に対する強烈な既視感覚をあたえるところが凄い。

かつてライシャワー教授は「ヨーロッパ社会とは本質的に戦国時代のままだ」と喝破したことがあるが、ラトビアを通じてヨーロッパの地平線が見える意義は大きい。

(注：映画のDVD レンタル可能) S T

★ラトビアとフランスのオペラ歌手を迎えて！★

8月23日（日） 大阪第一ホテルにて



堺シティオペラ「シンデレラ」



カトンさん（左）とノルヴェリスさん（右）を囲んで

堺シティオペラ「シンデレラ」（9月5日・6日公演）に出演するため来日したラトビアとフランスの男性オペラ歌手お二人の歓迎パーティを開催しました。

この二人は8月初旬に来日し約1ヶ月にわたる猛練習を行ったそうですが、そのかいもあって2日間の公演は大盛況のうちに終演しました。

歓迎会では、ビゼー作曲 オペラ「美しいパースの娘」より「愛の炎が」、ムソグルスキー作曲「アウエルバッハの酒場でのメフィストフェレスの歌」（蚤の歌）、ヴェルディ作曲「シチリア島の夕べの祈り」より「ああ パレルモ！」など、素晴らしい生の歌声を披露していただき、至近距離で聴く「本物の歌声」に触れた参加者からは、感嘆とため息の声があがっていました。

ラトビアから来日したノルヴヴェリスさんは、今回の『シンデレラ』で8回目の来日だそうです。また来年もお待ちしております！ぜひ応援をよろしくお願いします。本企画は大阪・サントペテルブルグ・クラブの岩本泰昌様にご協力をいただきました。ありがとうございました。

★お二人のプロフィールとスナップ★



★クリスティアニス・ノルヴェリスさん（バス）
1971年ラトビア生まれ。
1998年ラトビア音楽アカデミーを卒業。
1999年J. ヴィトレス国際コンクールにおいて、最優秀賞を受ける。その優れた歌唱力と演技力は常に高い評価を得ている。

ノルヴェリスさん（ラトビア） ピアノ：堅田京子さん

★フレデリック・カトンさん（バス・バリトン）

ニース音楽院で音楽を始め、ヴェルサイユ・バロック音楽院、リヨンオペラ座で学んだ後、同劇場に入団。以来様々な役を歌い、公演・録音をこなしてきた。



カトンさん（フランス）



東郷武理事長
歓迎のご挨拶



堺シティオペラ中村真貴子様
オペラ公演の紹介



乾杯のご発声
天江喜七郎会長



大阪サントペテルブルグクラブ
岩本泰昌様



会員の木村咲子さんからラトビアからの輸入服の紹介



中締め 正司泰一郎理事



会場にて記念写真



★★ ヴァイヴァルス大使 岡山で出前授業～EUについて語る～★★

「EU スクールデイズ 2009」

2009 年 5 月 7 日

「EU スクールデイズ 2009」は、日本の若い世代に EU への理解を深めてもらおうと、駐日欧州委員会代表部（東京）が 2007 年から全国の中高校などで実施。日本に駐在する EU 諸国の大使が年に一度、日本各地の高校を訪問して、自国のことや EU のことについて高校生たちに直接語りかけるという素晴らしい行事です。今年はヴァイヴァルス大使が岡山県立芳泉高校を訪れ、1、2 年生 600 名を対象に、EU とラトビアについて講演を行いました。

ヴァイヴァルス大使はまず、戦争の無い平和な地域を作るために知恵を出し合った結果が、個々の国家のアイデンティティを大事にした連携である「欧州連合 EU」であるとその意義について話され、具体的な活動や今後の方向について映像を使ってわかりやすく説明されました。

講演後は活発な質疑応答が行われ、「ラトビアの食べ物は？大使の年収は？？」といった今風な質問も飛び出しました。大使は、サーモンやマスなど生の魚を食べる習慣が日本と似ている点や主食がコメでなくパンとジャガイモという相違点について説明され、また年収については「金融危機による経済情勢の悪化の中でも外交官という仕事が大変おもしろく誇りを持っているので皆さんも興味をもってもらえると嬉しい」と、仕事の報酬はお金以外にもあると生徒に熱く語られました。さらに講演の後、校長室にまで押しかけてきた女子生徒らとさらに懇談し予定の時間をオーバーして熱心に生徒たちの質問に答えておられた大使の姿が印象的でした。



上段：EU 国旗の前で講演する大使と質問する男子生徒

左：講演の後、校長室にて生徒たちの質問に答える大使とオルロフス書記官

【生徒たちとの主な質疑応答】

- Q. 日本の印象は？・・・A. **大好き！恋に落ちた！** 大変良い印象を持っています。あと 3 年はぜひ駐在したい！
- Q. 日本に伝えたいラトビアの最も良いところは？・・・A. 豊富な文化的遺産。
5 年に一度の大きな音楽祭がある。3 万人もの人が全国から集まり民族の歌と一緒に歌う。スポーツではバスケットやアイスホッケーが盛んである。また加藤登紀子さんの歌「100 万本のバラ」の原曲はラトビアの歌です。
- Q. 経済危機の中で EU はどんな対策をとっていますか？・・・A. 消費を増やすために、資金を投入しようとしている。お金を借りやすくするよう金融システムを安定させる政策を実行中である。
- Q. 大使から見て日本人の良いところは？・・・A. 勤勉なところ。また日本の文化やアートは素晴らしいと思う。シンプルの中に美しさがある。
- Q. 岡山の印象は？・・・A. 初めてだが、自然が豊かでとてもよい印象をもった。山登りが趣味で自然にふれるのが好きなので大変気に入りました。
- Q. ラトビアと日本の似ているところは？・・・A. 宗教は似ている。13 世紀にドイツからキリスト教が入ってきたが、それ以前は自然を崇拝していた。またラトビア人は歌うことが好きな民族です。数多くの民族の歌を、人から人へ口伝で伝承している。
- Q. 島国と陸続きの国の外交の違いはありますか？・・・A. ...あまりないと思います

岡山県立芳泉高校での講演を終えられたヴァイヴァルス大使は、石井知事（左）や岡山商工会議所に岡崎会頭（中央：岡山瓦斯社長）を表敬訪問された後、山陽新聞社の越宗社長（右）を訪問、「最近日本からラトビアへの観光客が二けたの増加率で推移している。世界遺産に登録されている首都のリガや美しい自然を、多くの岡山の人に見てもらいたい」と熱心にPRされました。越宗社長は、2001年に地場企業が参加した「ロシア・バルト三国産業視察・観光訪問団」で訪れたラトビアについて「自然や街並みが素晴らしかった！」と思い出を語られました。



石井岡山県知事と



岡崎会頭（岡山瓦斯社長）と



山陽新聞社越宗社長と

★ラトビア語教室スタート★

★2009年6月★

5月の総会の際に会員の方より「ラトビア語を勉強してみたい！」という声があがり、大阪大学の留学生リンダ・ガルワーネさんに打診したところ快く先生役を引き受けていただきましたので、6月16日（火）に名誉領事館にてラトビア語教室を開講しました。



なごやかな勉強風景

授業は月に2回、17:30から90分間で、現在東郷名誉領事ご夫妻をはじめ8名の方が、リンダ先生の厳しい？ご指導を受けておられます。アルファベットの発音から簡単な挨拶などの会話、カルタとりのような単語の練習などリンダ先生はいろいろと工夫を凝らしてくださっております。また「ヤーニスの祭り」というラトビアの伝統的なお祭りの歌をみんなで練習しています。受講料は一人1回当たり2000円で、授業後には軽食とお茶で楽しく歓談しています。興味のある方はぜひ一度お立ち寄りください。

11月には、教室に初めてリンダ先生以外のラトビア人ゲストが訪れました（写真右）

ラトビアで「アドラー心理学」という学派を学び自らカウンセラーとして活躍されておられるヨランタ・チハノヴィカさんと娘さんのナラさんです。

教室では、お二人を交えて6月から勉強してきたラトビア語の会話を試みました。リンダ先生からは「自信をもって話すことが大事ですよ！」とアドバイスをいただきましたが、なかなか難しいものです。授業の後は、中華料理を食べながら楽しいひとときを過ごしました。

今回ヨランタさんは、日本アドラー心理学会の野田俊作氏の招きで来日され、全国各地で講演活動をされたそうです。「日本の皆さんを勇気付け、元気にしたい！」と熱く語っておられました。小柄なお身体に大きなパワーを秘められた魅力的な方でした。



リンダ先生・ヨランタさん・ナラさんを囲んで懇親会

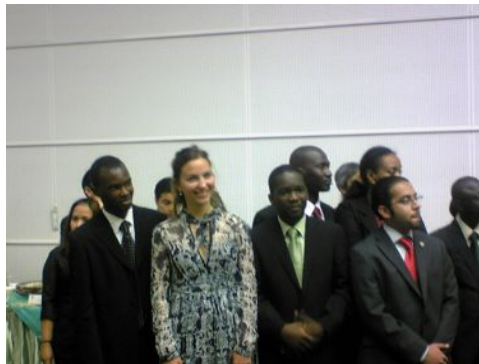


【写真左】左から二人目がヨランタさん、続いてナラさん【写真右】中央ヨランタさん 日本アドラー心理学会の講演会で（野田俊作様提供）

★名誉領事館日記★ 外務省リンダさんが 日本語研修を終えてラトビアへ帰国
修了書授与式風景 2009年5月28日



藤センター長から修了証書授与



各国の研修生の皆さん



なごやかな懇親会風景

国際交流基金が、各国から外交官や研究者を招いて日本語を学んでいただく研修プログラムに参加されていた、ラトビア外務省のリンダ・ガイビゼラさんが8ヶ月間の勉強を無事終了され帰国されました。関西国際空港の近くにある関西国際センターにて厳しい研修を受けたリンダさんは、来日した当初と比べて見ちがえるほど日本語が上達され、今後は日本とラトビアの間の友好の架け橋になっていただけるものと期待しています。

★「EU フィルムデーズ 2009in 京都」が開催★ 2009年6月17日



東京での開催と同時に「EU フィルムデーズ」が京都のドイツ文化センター（京都市）にて開催されました。

この催しは欧州連合（EU）の市民交流の促進を目的に毎年5月に行われる「日・EU フレンドシップウィーク」の一環として開催され、EU加盟国の近代映画を集め、ヨーロッパの社会・文化の多様性を紹介する映画祭です。京都国立近代美術館とドイツ文化センターのお力で今年から京都でも日本初公開のラトビア映画「バトル・オブ・リガ」をはじめ、EU諸国の個性豊かな作品が鑑賞できるようになりました。

開会式では、約50名の関係者の参加のもと、主催者である京都国立近代美術館の岩城館長ならびにカーラ・ヴァースラーレン EU駐日代表部総務部長が挨拶されました。

岩城館長は「日本で7回目となるフィルムデーズが東京以外で初めて開催されることは大変意義深いことである」と今後の発展に期待を寄せられ、ヴァースラーレン女史は「この映画祭を通じてEUの思想である【統一と多様性の調和】を広く知らしていきたい」と抱負を述べられました。EU加盟国を代表して参加されたミュラー総領事の「カンパイ！」の発声の後、参加者はなごやかに懇親のひとときをもちました。



京都国立近代美術館
岩城見一館長



ヴァースラーレン
EU駐日代表部総務部長



ミュラー
ドイツ連邦共和国総領事

★国際青年育成交流事業「フェアウェルパーティ イン 大阪」★

ラトビアから来日中の12名の学生たちが帰国を前に大阪を訪れました 2009年7月



大阪では、学生たちはそれぞれホストファミリーのお宅で過ごし、大阪の暮らしや文化に直接触れました。お別れのパーティには、ホストファミリーの皆さんもご招待され、民族衣装に身をまとった12名は、歌と踊りの国ラトビアを代表して、素晴らしい合唱や踊りを披露してくれました。参加者も一緒に歌い、踊り、日本での最後の夜にふさわしい、大変楽しいひと時となりました。

★広島市の修学旅行生がラトビア名誉領事館を訪問！ ★ 2009年7月23日

広島市立牛田中学校の3年生4名が、修学旅行中の体験学習の一環として在阪の名誉領事から外国文化を学ぶためラトビア名誉領事館を訪れ、東郷武名誉領事からラトビア共和国について講義を受けました。



ラトビアからの留学生リンダさんを囲んで勉強

当日は、大阪大学に留学中のリンダ・ガルワネさんにもお越しいただき、ラトビアの歴史や文化について生の情報を伝えていただきました。

また、質問コーナーでは、「ラトビアでは何が流行していますか？」との質問があり、リンダさんは「ラトビア人は歌うことが大好き。5年に一度、『歌と踊りの祭典』があり、国民は楽しみにしています」と応えました。他にも国歌や料理に関する質問があり、東郷名誉領事は、DVDの映像を使いながらわかりやすくラトビアの魅力を伝えました。

約1時間半メモを取りながら真剣に耳を傾けていた中学生たちは「今日学んだことを帰ってから学校新聞に掲載します」と2人に約束してくれました。楽しい時間を過ごせたことで4人の表情はたいへん輝いていました。

★大阪市長主催関西領事団との懇親会★ 2009 年 10 月 6 日



平松市長のご挨拶



領事団長に就任したプロホロフ・イワン・ロシア総領事と

京阪神エリアには現在領事館などの公館が 57 あるそうです。今年はリトアニア（大林組）、カザフスタン（東芝）の名誉領事館が新設されました。毎年恒例の平松市長ならびに大阪市会議長が関西領事団の皆さんを招いて行う懇親会が、市長公館にて開催されました。あいにくの雨模様にもかかわらず、関西の多くの領事、名誉領事が集合しました。今回領事団団長には ロシアの領事プロホロフ・イワン氏が就任されました。日本語の上手なユーモアあふれる方でした。

★大阪市長杯「世界スーパージュニア・テニス選手権」にラトビア選手が出場★ 2009 年 11 月 7 日



（左より）藤本理事、ミケリス選手とコーチで父親のリビエティスさん

本大会は、毎年大阪にて開催される世界ジュニアの選手権ですが、今回は 30 カ国から 176 名の選手・コーチが来日し、19 日から 25 日の決勝戦まで熱戦を繰り広げました。ラトビアからも男子選手ミケリス・リビエティスさん（17 歳）が参加しました。大会初日の 19 日に、選手の皆さんを歓迎するレセプションが、リーガロイヤルホテルにて開催されました。東郷名誉領事の代理として関西日本ラトビア協会理事の藤本様と金井事務局長が出席し歓迎と激励の意を表しました。残念ながらミケリスさんは 3 回戦で第 2 シードの台湾選手に敗れたもののラトビアを代表して健闘されました。

★「EU ビジネスマン日本研修プログラム」にラトビアから 2 名が参加★

神戸で開催されたレセプションにて東郷名誉領事が激励！ 2009 年 10 月 8 日



ナターリヤ・ブガイェヴァさん（左）
とダリア・スカニコヴァさん

「EU ビジネスマン日本研修プログラム」は、EU 委員会が、日本市場への進出を目指す欧州企業の方々を日本に招いて次世代のビジネスリーダーとして教育する人材育成のプログラムです。

1997 年から 1000 名以上の方が参加してきましたが、今回はラトビアから二人の女性、ナターリヤ・ブガイェヴァさん（左）とダリア・スカニコヴァさんが参加されています。

この研修は、日本語と日本文化ならびにビジネスの基本知識をマスターした後来日し、早稲田大学においてさらに高度な知識を勉強するそうです。しかも 3 ヶ月間にわたり、日本企業にインターンシップとして入社し、ビジネスの実際の現場も体験するかなりハードなものです。

お二人にはぜひ日本通になっていただき、日本と EU・ラトビアとの経済の交流に力を発揮していただければと思います。

関西学院にイアン・オゾリンという名のラトビア人教師がいたことに気付いたのは、今から10年ほど前のことだった。アメリカとカナダのメソヂスト教会が経営する大正時代の関西学院にラトビア人教師がいたこと、しかも、北米の宣教師が何人もいる学校で、英語圏でないラトビア人が英文学を教えていたことが私には不可解だった。むきになって学生と議論し、寮で学生と一緒に味噌汁をすすり、井を食べていたとの記述にも心魅かれた。当時の宣教師は、洋風の宣教師館に住み、コックを雇って自分たちのために洋食を作らせていたからである。また、昭和初期の文献には「今ラトビアの文部大臣をやつてゐられるといふから大したものだ」という記述（この情報は不正確）まであるのに、『関西学院百年史』にオゾリンの名が出て来ないことも不思議だった。

このような理由から、私は仕事の傍ら、気になるオゾリンの姿を学院史編纂室所蔵資料の中に探し求めるようになった。しかし、学内の資料からは限られた情報しか得られず、オゾリンに対する謎は深まる一方だった。また、私の周囲には、オゾリンの存在に関心を示してくれる人もいなかった。

思わぬ転機を迎えたのは2年前の夏である。大阪外国語大学（現：大阪大学）に留学中のラトビア人学生タイシヤ・カラブリナさん（通称ターヤさん）から、オゾリンに関する問い合わせを受けたのである。私は、その時点でつかんでいたオゾリンに関する情報をターヤさんに提供した。と同時に、年2回発行し、学内教職員に配布している『学院史編纂室便り』にオゾリンのことを書くことにした。

こうしてまとめた「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンをめぐって」は、『学院史編纂室便り』第26号（2007年12月14日）に掲載された。そこで紹介した主な内容は、次の通りである。

- ・ 理事会記録等から、オゾリンが関西学院高等学部（文科・商科）で教鞭を執っていたのは、1918年9月から21年7月までと考えられる（途中不在期間あり）。
- ・ オゾリンを関西学院に紹介したのは、カリフォルニア大学留学中に知り合った関西学院の卒業生畑歟三（畑道也第14代院長の父）である。畑も高等学部の教師を務めた。
- ・ オゾリンは関西学院で教えながら、ラトビア領事の役割を果たしていた。
- ・ 教え子曾根保の翻訳により、1921年に『琥珀の國』を出版した。
- ・ オゾリンの辞職に当たり、関西学院理事会は特別に感謝の気持ちを表し、謝礼を贈った。

年が明けると、「マーラが与えた人生」のCDを出された歌手小田陽子さんがこの記事で日本ラトビア音楽協会の新年会で紹介してくださった。その後、オゾリンと関西学院の関係を知った駐日ラトビア共和国大使館から連絡を受け、3月に大使館を訪問し、ペーテリス・ヴァイヴァルス大使にお目にかかった。大使は、本国の外務省に連絡してオゾリンのことを調べさせると約束してくださった。10月には大使を関西学院にお迎えし、大学主催特別講演会「バルト海の真珠ラトビア―EUの一員」でお話いただいた。10年間、周囲の誰も関心を示してくれない中、頭の片隅から離れることのなかったオゾリンのことが、こうして多くの人に知られるようになったのである。

オゾリンが関西学院で英文学を教えていたのは、1920年前後のことである。オゾリン自身は1959年に亡くなっており、当時の教え子が生存しているとは考えにくい。にもかかわらず、オゾリンが関西学院に残したものは今も生きている。ラトビアを紹介した著書『琥珀の國』だけでなく、『関西文学』第3号に掲載された論文「イアン・ポーロックとラトビア文学」、関西学院での講義内容をまとめたと思われるタイプ原稿“Twelve Lectures on the Meaning and Value of Life”と“An Introduction to English Poetry”からもその確かな足跡がうかがえる。また、卒業アルバムの写真や教え子の書いた文章からは、オゾリンが関西学院の教職員、学生に与えた感化の大きさが偲ばれる。さらに、私自身のことを顧みれば、オゾリンの影響は計り知れない。

ところで、大使がお約束くださったオゾリンに関する調査であるが、昨年10月に関西学院を訪問された際、その調査結果をお持ちくださった。それは、外務省公文書管理局の古文書専門調査官シルヴィヤ・クリジェヴィツァさんが執筆されたオゾリンに関するラトビア語論文だった。（次ページに続く）

この論文は、神戸薬科大学教授の田中研治先生（関西学院大学出身）が大阪大学大学院文学研究科に留学中のリンダ・ガルワーネさんの協力を得て、日本語への翻訳を進めてくださっている。6月からラトビア語の勉強を始めたばかりの私も、この翻訳作業の場に同席させていただいた。おかげで、関西学院の資料からはうかがい知ることのできなかったラトビア領事としてのオゾリンの働きや、離日後、1959年にニューヨークで亡くなるまでのオゾリンの足跡を追うことができた（奥さんとお嬢さんがいたことも！）。オゾリンに導かれるまま、多くの人（ラトビア人・日本人）や資料との出会いを重ね、いつしか私の世界は大きく広がった。90年前に神戸で活躍したオゾリンは、目に見えない糸を私の周囲に張り巡らせてくれていたのである。



写真：イアン・オゾリン『関西学院高等学部商科
第4回卒業アルバム』（1919）より

【追伸】学生交換協定が締結されました！

関西学院大学とラトビアの大学の間で何らかの交流ができないか、できるとしたら、どの大学とどのような内容とするのが関西学院にふさわしいか、お目にかかる度に、ヴァイヴァルス大使は私に声をかけてくださっていました。

そのおかげで、2009年11月30日、関西学院大学とラトビア大学との間で、学術交流協定、学生交換協定が締結されました！

オゾリンが関西学院に蒔いた種が、90年の時を超えて芽吹き始めたのです。（池田裕子）



関西学院大学での特別講演会にて（2008年10月）

★ 関西日本ラトビア協会 第1回総会とヴァイヴァルス大使講演会 ★

2009年5月9日 於：橿原ロイヤルホテル（奈良県橿原市）

ヴァイヴァルス駐日全権大使をお招きして、第1回総会が、大和ハウスグループの橿原ロイヤルホテルにて開催され、50名を越える会員の皆様が参加されました。総会に先立って理事会が開かれ、続いて11時より総会が始まりました。

総会では、先ずヴァイヴァルス大使から「“関西日本ラトビア協会”が設立されて半年余、名誉領事館の開設から大変アクティブな1年でした。今後も関西と友好関係を深め、協会も段々大きく立派にスムーズになることを期待します。」とお礼と激励の挨拶がありました。



東郷理事長の挨拶（左はオルロフス書記官）

その後、議事に入り、冒頭に東郷理事長からご参加のお礼と「この橿原という土地は、歴史的にも万葉のふるさと古代ロマンが色濃く残る地で、飛鳥の政治・文化の中心即ち古代都が置かれた地でもあります。この地で開催できて大変うれしく思います」と挨拶が行われた後、議事に従って以下のとおり決議されました。

【審議内容】

議案1：東郷理事長から様々な行事がスムーズにおこなわれたこと、神戸市のラトビア訪問ツアーがインフルエンザ流行のため延期になったこと等が報告されました。

議案2：寺岡監事から、収支報告があり、会員数が173名になったこと等が報告されました。

議案3：最後に金井事務局長から今年度活動の活動計画について『JLSK ニュース』の発行と新規入会勧誘の協力要請が行われました。

【ヴァイヴァルス大使講演】「ラトビアの歴史と将来」

総会に続いて行われた講演会では、まず映像で「ラトビアの歴史と文化」の紹介があり、現在に至る歴史と様々な芸術家や建築物などが紹介されました。

その後、大使の略歴が発表されて、いよいよ大使の講演が始まりました（オルロフス書記官が通訳 以下要旨）

ラトビアは2008年11月17日に建国90周年を迎えました。ところでラトビアは二度の世界大戦で独・ソ両軍の衝突の舞台になり、その狭間で翻弄され続けましたが、1990年5月4日に独立宣言を行いました。その後2004年5月1日にEU加盟を果たしました。いずれも5月に記念すべき出来事が起こっています。そして今年、関西日本ラトビア協会の記念すべき第1回総会が、同じ5月に開催されることを心からお祝いします。ソ連の占領下から独立を回復した1991年以降は、ラトビアは経済的に急成長を遂げてきましたが、現在はグローバルな金融危機、ローンの貸付が止まるなど大変な時期を迎えています。将来の予測は難しいものの、今は病気にかかっているようなものだと考え、楽天的に明るく、ラトビアの魅力である積極的に海外に発信しながらビジネスチャンスをつかめるよう頑張りたいと思います。



ヴァイヴァルス駐日全権大使の講演



お母様の手作りの花束を贈呈する
木村咲子さん

ヴァイヴァルス大使は、日本とラトビアの話題として以下の3つをあげられました。

- ① JTB で日本とラトビア間に直行便を飛ばします
- ② EU 映画祭にて「バトル・オブ・リガ」を東京と京都で放映
- ③ ラトビア料理キャンペーンを東京で行い好評でした

また大使は、会員からの質問に対して、今後は地理的な優位性を活かして、林業以外に貿易・物流に力を入れて産業の活性化をはかりたいと、将来に対する抱負を語られました。EU の一員として成長していくと楽観的な大使の言葉はたいへん頼もしく感じられました。

講演後に、お礼として会員を代表して木村咲子さんから大使へ花束贈呈が行われました。

大使は「樞原の『樞』は、ラトビア語で『立派な木』を意味します。ラトビアらしい言葉で大変懐かしく思いました。」とたいへん感激されておられました。

無事に総会・講演会を終了し、引き続いて懇親パーティが開催されました。参加された会員の皆さんはヴァイヴァルス大使とオルロフス書記官を囲んで楽しいひと時を過ごしました。



大使を囲んで記念撮影



上野常務理事による乾杯の音頭



谷本理事（ステンダース・ジャパン代表）



池田理事（関西学院大学）

オレグス・オルロフス書記官



中締め 庄司理事



ラトビア国旗

大使とともに参加されたオルロフス書記官からは、ラトビア国旗の由来について紹介いただきました。ラトビアの独立戦争で傷ついた兵士を運んだ白い布が、血の色で染まり、横たわっていた身体の部分だけが白く残っていた。独立のために戦った多くの兵士たちに敬意を表しているのだというお話はとても感動的でした。

中締めは、正司理事(元宝塚市長)より、「大使は素晴らしい方です。そのお人柄もあって、今後ラトビアと日本は経済・人などの交流がますます盛んになるでしょう。また我々がラトビアに学ぶところも沢山あります。また大使の話聞いて、多様な価値観があると改めて実感しました。ヒマラヤの秘境ブータンの国王が提唱した言葉『GNH(グロス・ナショナル・ハッピーネス)』を思い出しました。ブータンは国民所得では、最貧国に分類され、人口70万人の小国とみなされています。しかし経済発展のGDPではなく『国民総幸福』で価値観をはかるという考え方で明るく前向きに進んでおられる。素晴らしいことです。」という含蓄のあるお話をいただきました。（益田信行）

【連載】★ラトビアの歴史 ★ 第1回

今年は、ベルリンの壁崩壊から20年、同じくラトビアを含むバルト3国の市民が[人間の鎖]で独立への願望をアピールしたのも20年前です。創刊号で、益田信行氏（JLSK 会員）から「ラトビア共和国の概要」として、20世紀以降の歴史について一部を簡単に紹介いただきました。今回は国の生い立ちについて綴っていただきます。

● 前史 紀元前 ラトビア人の祖先

インド・ヨーロッパ語族のレット人(バルト語族)が、今のラトビアの地に移住し始めたのは、紀元前2000年頃といわれている(ラトビア人の祖先)。そして紀元前1世紀頃リープ人(ウラル語族)が大半して北シベリアから移住し定住した。

古代ラトビア人は、農業・牧畜・狩猟・漁業を営み、自分たちの神に祈りを捧げていた。

● ドイツ騎士団による植民地支配 12世紀 首都リガの建設とキリスト教

8世紀頃にスカンジナビア半島からバルト海を渡って進出しはじめたバイキングは多くの居留地を持ったが10世紀頃には全て消滅。バイキングについて12世紀に登場したのがドイツ人であった。

13世紀リヴォニア常剣騎士団およびそれを併合したドイツ騎士団の東方植民で徹底的なキリスト教化が推し進められ、現在のラトビアの首都リガもこのときに建設され、キリスト教布教の中心地でありキリスト教徒の砦となった。リープ人は騎士団のために激減し、以後ラトビア人がこの地の主要民族となった。

一口メモ : **ハンザ同盟**

ハンザとはドイツ語で「団体」の意味。12世紀頃にハンザ同盟を名乗る都市連合が生まれ、全盛期は数百もの都市が加盟し、北ヨーロッパ、バルト海の交易を支配した。中世の北欧商業権益を守るために、各都市に結成された貿易商人の集団。



●スウェーデン・ポーランドの支配 16 世紀

16 世紀にはバルト海の覇権をめぐるリトアニア、ポーランド、スウェーデン・バルト帝国の支配を受ける。この過程でラトヴィアは、北部リヴォニアと南部クールラントに分裂し、北部はスウェーデンに、南部はポーランド、次いでロシア帝国の影響を受ける。

- ・ スウェーデン・ポーランド戦争。(1600～1629)
リヴァント(スウェーデン)とクールラント(ポーランド)に分裂(スウェーデン・ポーランド領となる)
- ・ 北欧戦争(1700～1721) スウェーデンはラトヴィアの支配を失う。

● ロシア帝国の支配 18 世紀

18 世紀になると、大北方戦争などのあおりを受けてラトヴィアはロシア帝国の支配下に置かれた。しかし 19 世紀にはロシアより早く農奴解放を行ったため、順調に資本主義経済と市民社会の形成がなされた。それが、ラトヴィア人の知識人や民族主義者を生む背景となった。またバルト三国ともにバルト・ドイツ人による主要民族に対する啓蒙運動が興り、ロシアからの自立を望むきっかけが創られた。

一口メモ : 日露戦争とラトヴィア

NHK で 3 年にわたって映像化される大河ドラマ「坂の上の雲」(司馬遼太郎原作)がスタートしたが、その舞台となる日露戦争時代はラトヴィアとも大いに関係している。

帝政ロシアの主力艦隊バルチック艦隊は、1904 年 10 月 15 日に日露戦争に向けてリバウ軍港(現在のラトヴィアのリエパーヤ)を出港した。これが日本の命運を賭けた世界史的にも有名な日本海海戦(1905 年 5 月)の相手方であり、日本海軍の連合艦隊は海戦史上まれな一方的勝利を納めた。当時後進国と見られていた日本の勝利は世界を驚かせることとなった。

付記: 作成にあたり参考にさせてもらったリソースは、フリー百科事典ウィキペディア、外務省資料、バルト三国の歴史(志摩園子著)他です。(益田信行)

★日ラ友好の歩み : 合唱団「コールフェニックス神戸」のリガ訪問(2007 年 5 月)★



阿部雅子様(前列左端の着物の方)



リガ市役所でビルクス前市長と加賀昌一様(右端の方)



ラトヴィアとの交流は、古くは関西学院のオゾリンさんや姉妹都市・神戸の官民の交流、リガウッドジャパン上野代表の合板事業など数多く実績として残っています。今年 8 月のオペラ歌手との懇親会にて会員の阿部雅子様から、所属される「コールフェニックス神戸(代表: 井上昭二さん)」のメンバー 20 名が 2007 年 5 月にリガ市を訪れ、現地の女声合唱団と合同演奏会を開催されたとお聞きし、当時の写真を見せていただきました。

以前、同じくメンバーで会員の加賀昌一様から「神戸市長の親書を携えてリガ市役所を訪問された」とお聞きしていましたが、その写真を見て、震災から不死鳥のように復興された神戸市民の歌声を、合唱の本場で高らかに響かされたことだろうと感慨深く想像しました。帰国後には森林植物園「森の秋音楽祭」に招待され、今回の記念植樹の場である「リガの森」でも歌われたそうです。

このような多くの皆様の残された軌跡の延長線上で、関西日本ラトヴィア協会は活動させていただいているものと敬意を表します。阿部様から貴重な交流活動の写真をお借りできましたので紹介させていただきます。

編集後記: 名誉領事館開設から早 1 年半を過ぎ、JLSK の会員も 200 名近くなりました。金融危機以降、日本でのラトヴィアに関する報道は「高い失業率」や「GDP マイナス成長」といったことばかりで明るいニュースが少ない中、先般 EU 大統領選挙に前ラトヴィア大統領で「バルトの鉄の女」の異名を持つビケフレイベルガ女史が立候補するというニュースがありました。残念ながら 5 億人を超える EU のトップにはなれませんが、小国ラトヴィアの女性がチャレンジするという快挙に大変勇気付けられました。先行きはまだまだ不透明ですが、JLSK 事務局としては、今後も様々な交流イベントを通じて、少しでも日本・関西とラトヴィアのつながりを深められたらと念願しております。引き続き皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。(事務局長 金井雅孝)